

母

芥川龍之介

青空文庫

部屋へやの隅に据えた姿すがたみ見みには、西洋風に壁を塗った、しかも日本風の畳畳がある、——上シャンハイ海特有の旅館の二階が、一部分はつきり映うつっている。まずつきあたりに空色の壁、それから真新しい何なんじよう畳畳かたたみの畳畳、最後にこちらへ後うしろを見せた、西洋せいよう髪がみの女が一人、——それが皆冷やかな光の中に、切ないほどはつきり映うつっている。女はそこにさつきから、縫ぬい物ものか何かしているらしい。もつとも後は向いたと云う条、地味じみな銘めい仙せんの羽織の肩には、崩くずれかかった前まえ髪がみのはずれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論

肉の薄い耳に、ほんのり光が透いたのも見える。やや長めな揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤児の啼き声のほかにも、何一つ沈黙を破るものはない。未いまだに降り止まない雨の音さえ、ここまでは一層その沈黙に、単調な気もちを添えるだけである。

「あなた。」

そう云う何なんぶん分かが過ぎ去った後のち、女は仕事を続けながら、突然、しかし覚おぼつか束なさそうに、こう誰かへ声をかけた。

誰か、——部屋の中には女のほかに、丹たんぜん前を羽織はおった男が一人、ずっと離れた畳の上に、英字新聞をひろげたまま、長なが々と腹はら這はいばになっはっている。が、その声が聞えないのか、男は手近ながの

灰皿へ、まきたばこ巻煙草の灰を落したきり、新聞から眼さえ挙げようとしない。

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癡女自身の眼もじつと針の上に乗まっている。「何だい。」

男は幾分うるさそうに、まるまる丸々と肥った、くちひげ口髭の短い、活動家らしい頭をもた擡げた。

「この部屋ね、——この部屋は変えちやいけなくなつて？」

「部屋を変える？ だってここへはやつと昨夜、ゆうべ引つ越して来たばかりじゃないか？」

男の顔はげげんそうだった。

「引つ越して来たばかりでも。——前の部屋ならば明あいているでしよう？」

男はかれこれ二週間ばかり、彼等が窮屈な思いをして来た、日当りの悪い三階の部屋が一瞬間眼の前に見えるような気がした。

——塗りの剥はげた窓側まどがわの壁には、色の変った畳の上に更紗さらしの窓

掛けが垂れ下っている。その窓にはいつ水をやったか、花の乏し

い天竺葵ジエラニアムが、薄ほこりい埃をかぶっている。おまけに窓の外を見ると、

始終ごみごみした横町よこちょうに、麦藁帽むぎわらぼうをかぶった支那シナの車夫が、

所在なさそうにうろついている。………

「だがお前はあの部屋にいるのは、嫌いやだ嫌だと云っていたじゃないか？」

「ええ。それでもここへ来て見たら、急にまたこの部屋が嫌になつたんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂^うそうに顔を挙げて見せた。眉^{まゆ}の迫つた、眼の切れの長い、感じの鋭^こそうな顔だちである。が、眼のまわりの暈^{かき}を見ても、何か苦勞^こを堪^こえている事は、多少想像が出来ないでもない。そう云えば病的な気がするくらい、米^{こめ}噛^かみにも静^{じょう}脈^{みやく}が浮き出している。

「ね、好^いいでしよう。……いけなくて？」

「しかし前の部屋よりは、広くもあるし居^い心^{こころ}も好^いいし、不足を云う理由はないんだから、——それとも何か嫌^{いや}な事があるのかい？」

「何って事はないんですけれど。……」

女はちよいとためらったものの、それ以上立ち入っては答えなかつた。が、もう一度念を押すように、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくって、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草たばこの煙を吹きかけたぎり、好いいとも悪いとも答えなかつた。

部屋の中はまたひっそりになった。ただ外では不あいか相わ変らず、休みみのない雨の音がしている。

「春はる雨さめやか、——」

男はしばらくたつた後のち、ごろりと仰あ向おきに寝ね転ころぶと、独り言のようになつた。

「蕪湖住みをするようになったら、発句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせず、縫物の手を動かしている。

ウウフウ

「蕪湖もそんなに悪い所じゃないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相当に広いしするから、草花など作るには持つて来いだ。何でも元は雍家花園とか云つてね、——」

男は突然口を噤んだ。いつか森とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはいがしている。

「おい。」

泣き声は急に聞えなくなつた。と思うとすぐにまた、途切れ途切れに続き出した。

「おい。敏子。」

としこ

「

半ば体を起した男は、畳に片肘かたひじもた寄せたまま、当惑とうわくらしい眼つきを見せた。

「お前は己おれと約束したじゃないか？ もう愚痴ぐちはこぼすまい。も

う涙は見せない事にしよう。もう、——」

男はちよいと瞼まぶたを挙げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？ たとえば日本へ帰りたいとか、支那でも田舎いなかへは行きたくないとか、

——」

「いいえ。——いいえ。そんな事じゃなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外なほど烈はげしい打消し方をした。

「私はあなたのいらっしやる所なら、どこへでも行く気でいるん

です。ですけれども、——」

敏子は伏眼ふしめになつたなり、溢あふれて来る涙を抑おさえようとするのか、じつと薄い下唇したくちびるを噛んだ。見れば蒼白ほおい頬の底にも、眼に見えない炎ほのおのような、切迫した何物かが燃え立っている。震ふるえる肩、濡れた睫毛まつげ、——男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌いやなんですもの。」

「だからさ、だからさつきもそう云つたじゃないか？ 何故なぜこの

部屋がそんなに嫌だか、それさえはつきり云つてくれれば、——」

男はここまで云いかけると、敏子の眼がじつと彼の顔へ、注そそがれているのに気がついた。その眼には涙ただよの漂つた底に、ほとんど

敵意にも紛まがい兼ねない、悲しそうな光が閃ひらめいている。何故この部屋が嫌になったか？——それは独り男自身の疑問だったばかりではない。同時にまた敏子が無言むごんの内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇ちゆうちよ躊躇ちよちよした。

しかし言葉が途切とぎれたのは、ほんの数秒の間あいだである。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲みなぎって来た。

「あれか？」

男は感動を蔽おおうように、妙に素そつ気けのない声を出した。

「あれは己も気になっていたんだ。」

敏子は男にこう云われると、ぽろぽろ膝の上へ涙を落した。

窓の外にはいつのまにか、日の暮が雨を煙らせている。その雨の音を撥ねのけるように、空色の壁の向うでは、今もまた赤児が泣き続けている。……

二

二階の出窓には鮮かに朝日の光が当っている。その向うには三階建の赤煉瓦にかすかな苔の生えた、逆光線の家が聳えている。薄暗いこちらの廊下にいると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の画のように見える。巖乗な櫛の窓枠が、ちようど額縁を嵌めたように見える。その画のまん中には一人の女が、

こちらへ横顔を向けながら、小さな靴足袋くつたびを編んでいる。

女は敏子としこよりも若いらしい。雨に洗われた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、——派手はでな大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れている。それがやや俯向きうつむになった、血色の好いいい頬に反射している。心もち厚い唇の上の、かすかな生うぶ毛げにも反射している。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。商売に來たのも、見物に來たのも、泊とまり客はたいてい大抵外出してしまう。下宿している勤つとめ人にんたちも勿論午後までは帰って來ない。その跡にはただ長い廊下に、時々上草履うわぞうりを響かせる、女中の足音だけが残っている。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて来ると、出窓に面した廊下には、四十格好がっこうの女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画かげえのように通りかかった。女中は何とも云われなかつたら、女のいる事も気がつかずに、そのまま通りすぎてしまったかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安そうに声をかけた。

「お清きよさん。」

女中はちよいと会釈えしやくしてから、出窓の方へ歩み寄った。

「まあ、御精ごせいが出ますこと。——坊ちゃんはどうなさいました？」

「うちの若様？ 若様は今お休み中。」

女は編針あみばりを休めたまま、子供のように微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？ 真面目まじめそうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛まえかけだけくつきり照らさせながら、

浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村のむらさん、——野村さんでしょう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？ じゃ私わたしと同じ名だわね。あの方はもう御立ちにな

つたの？」

「いいえ、まだ五六日は御滞在ごたいざいでございましょう。それから何

でも蕪湖ウウフウとかへ、——」

「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらな

「かつたわよ。」「ええ、さくばん 昨晚急にまた、三階へ御部屋が変更しましたから、——」

「そう。」

女は何か考えるように、まるまる 丸々した顔を傾けて見せた。

「あの方でしょうか？　ここへ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになったんですけれど。」

「じゃ病院で御なくなりなすつたの？　道理で何にも知らなかつた。」

女は前髪まえがみを割った額ひたいに、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、す

ぐにまた元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯いたずらそうな眼つきになった。

「もうそれで御用済み。どうかあちらへいらしつて下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思わず笑い出した。

「そんな邪慳じゃけんな事をおつしやると、蔦つたの家やから電話がかかって来ても、内証ないしよで旦那様へ取次ぎますよ。」

「好いいわよ。早くいらつしやいってば。紅茶がさめてしまいうじやないの？」

女中が出窓にいなくなると、女はまた編物を取り上げながら、小声に歌をうたい出した。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎の花瓶ごとに素枯すがれた花は、この間あいだに女中が取り捨ててしまう。二階三階の真しん鍬ちゆうの手すりも、この間に下男ボオイが磨くらしい。そう云う沈黙が拡ひろがった中に、ただ往来のざわめきだけが、硝子戸ガラスを開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはいつて来る。

その内にふと女の膝ひざから、毛糸の球たまが転げ落ちた。球はとんと弾はずむが早いから、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下ろうかへ出ようとする、——と思うと誰か一人、ちようどそこへ来かかったのが、静かにそれを拾い上げた。

「どうも有ありがと難がたうございました。」

女は籐椅子とういすを離れながら、恥しそうに会釈えしやくをした。見れば球を拾ったのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂あぶらよりも白い括くくり指へ移った。

「ここは暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩まぶしそうにやや眼を細めた。

「ええ、こようやって居いりましたも、居睡いねむりが出るくらいでございますわ。」

二人の母は佇たたずんだまま、幸福そうに微笑し合った。

「まあ、御可愛いたあたですこと。」

敏子の声はさりげなかった。が、女はその言葉に、思わずそつと眼を外そらせた。

「二年ぶりに編針を持って見ましたの。——あんまり暇なもんですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠なまけてばかり居りますわ。」

女は籐椅子とういすへ編物を捨てると、仕方がなさそうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打ったのである。

「お宅の坊ちゃんは、——坊ちゃんでございましたわね？　いつ御生れになりましたの？」

敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日きのうは泣き声を聞いているのも堪えられない気がした隣室の赤児、——

それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、かえ反つて苦しみを新たにするのも、はつきりわかつてはいるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないように、敏子の心もいつのまにか、苦しみそのものの催眠作用に捉とらわれてしまった結果であろうか？ それともまた手傷てきずを負った兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快かいを貪むさぼるように、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であろうか？

「この御正月でございました。」

女はこう答えてから、ちよいとためらう気色けしきを見せた。しかしすぐ眼を挙げると、気の毒そうにつけ加えた。

「御宅ではとんだ事でございましたってねえ。」

敏子は沾うるんだ眼の中に、無理な微笑を漂うわせた。

「ええ、肺はいえん炎えんになりましたものですから、——ほんとうに夢のようでございました。」

「それも御出おいでて、そうそう々にねえ。何と申し上げて好よいかわかりませ
んわ。」

女の眼にはいつのまにか、かすかに涙が光っている。

「私なぞはそんな目にあつたら、まあ、どうするでございませ
う？」

「一時は随ずいぶん分ぶん悲ひしゆうゆうございましたけれども、——もうあきら
めてしまいましたわ。」

二人の母は佇たたずんだまま、寂しそうな朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風かぜが流行はやりますの。」

女は考え深そうに、途切とぎれていた話を続け出した。

「内地はよろしゅうございますね。氣候もこちらほど不順ではなし、——」

「参りたてでよくはわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」

「今年は余計——あら、泣いて居りますわ。」

女は耳を傾けたまま、別人のような微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もうそこへはさっきの女中が、

ばたばた 上草履うわぞうりを鳴らせながら、泣き立てる赤児あかごを抱だきそやして来た。赤児を、——美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤児を、——敏子が内心見まいとしていた、丈夫そうに頤あごの括くくれた赤児を！

「私が窓を拭ふきに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましなすつて。」

「どうも憚はばかり様。」

女はまだ慣なれなそうに、そつと赤児を胸に取った。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭いを感じた。

「おお、おお、よく肥ふとつていらつしやる。」

やや上じょう氣きした女の顔には、絶え間ない微笑が満ち渡った。女
 は敏子の心もちに、同情が出来ない訳ではない。しかし、——し
 かしその乳房ちゆうぶさの下から、——張り切った母の乳房の下から、汪おうぜ
 然んと湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつたのであ
 る。

三

雍家花園ようかかえんの槐えんじゆや柳ゆは、午過ひるぎの微風そよに戦まぎながら、庭や草や土
 の上へ、日の光と影とをふり撒まいている。いや、草や土ばかりで
 はない。その槐えんじゆに張まり渡した、この庭には似に合あわなない、水色のハ

ムモツクにもふり撒まいている。ハムモツクの中に仰あおむ向けになつた、夏のズボンに胴ちよッキ衣しかつけない、小肥こふとりの男にもふり撒まいている。

男は葉卷に火をつけたまま、槐えんじゆの枝に吊つり下げた、支那風の鳥籠を眺めている。鳥は文ぶんちよう鳥ちようか何からしい。これも明暗の斑はんて点んの中に、止とまり木ぎをあちこち伝わつては、時々さも不思議そうに籠の下の男を眺めている。男はその度にはほほ笑えみながら、葉卷を口へ運ぶ事もある。あるいはまた人と話すように、「こら」とか「どうした？」とか云う事もある。

あたりは庭木の戦そよぎの中に、かすかな草の香かを蒸むらせている。一度ずつと遠い空に汽船の笛ふえの響いたぎり、今はもう人音ひとおとも何

もしない。あの汽船はどうに去つたであらう。赤濁りに濁つた
ちようこう長江の水に、眩まばゆい水脈みおを引いたなり、西か東かへ去つたであ
 ろう。その水の見える波止場はとばには、裸も同様な乞食こじきが一人、西瓜すいか
 の皮を嚙かじつてゐる。そこにはまた仔豚こぶたの群むれも、長々ながながと横たわ
 った親豚の腹ちぶさに、乳房ちぶさを争つてゐるかも知れない、——小鳥を見
 るのにも飽あきた男は、そんな空想ひたに浸つたなり、いつかうとうと
 眠りそうになつた。

「あなた。」

男は大きい眼を明いた。ハムモツクの側に立つてゐるのは、上シ
ヤンハイ海の旅館ちゆうがたにいた時より、やや血色としこの好いい敏子としこである。髪にも、
 夏帯にも、中形ちゆうがたの湯帷子ゆかたにも、やはり明暗の斑点を浴びた、

おしろい
白粉をつけない敏子である。男は妻の顔を見たまま、無遠慮に
大きい欠伸あくびをした。それからさも大儀たいぎそうに、ハムモツクの上へ
体を起した。

「郵便よ、あなた。」

敏子は眼だけ笑いながら、何本か手紙を男へ渡した。と同時に
湯帷子ゆかたの胸から、桃色の封筒ふうとうにはいつている、小さい手紙を抜
いて見せた。

「今日は私にも来ているのよ。」

男はハムモツクに腰かけたなり、もう短い葉巻を噛み噛み、無
造作ぞうさくに手紙を読み始めた。敏子もそこへ佇たたずんだまま、封筒と同じ
桃色の紙へ、じつと眼を落している。

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戦そよぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒まいている。文鳥ぶんちようはほとんど囀さえずらない。何か唸うなる虫が一匹、男の肩へ舞い下りたが、直すぐにそれも飛び去いってしまった。……………

こう云うしばらくの沈黙の後のち、敏子は伏せた眼も挙げずに、突然かすかな叫び声を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですって。」

「お隣?」

男はちよいと聞き耳を立てた。

「お隣とはどこだい?」

「お隣よ。ほら、あの上シャンハイ海の××館の、——」

「ああ、あの子供か？ そりや気の毒だな。」

「あんなに丈夫そうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病気は？」

「やっぱり風邪かぜですって。始めは寝冷えぐらいの事と思ひ居り候ところ、——ですって。」

敏子はやや興奮したように、口早に手紙を読み続けた。

「病院に入れ候時には、もはや手遅れと相成り、——ね、よく似ているでしょう？ 注射を致すやら、さんそきゆうにゆう酸素吸入を致すやら、いろいろ手を尽し候えども、——それから何と読むのかしら？

泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分ほど前には、ついに息を引き取り候。その時の私の悲しさ、じゆうじ重

々^{ゆう} 御察し下され度、……」

「気の毒だな。」

男はもう一度ハムモツクに、ゆらりと仰向け^{あおむ}になりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭のどこかには、未^{いまだ}に瀕死^{ひんし}の赤児が一人、小さい喘^{あえ}ぎを続けている。と思うとその喘^{あえ}ぎは、いつかまた泣き声に変わってしまう。雨の音の間^{あいだ}を縫^ぬった、健康な赤児の泣き声に。

——男はそう云う幻^{まぼろし}の中にも、妻の読む手紙に聴き入っていた。

「重々御察し下され度、それにつけてもいつぞや御許^{おんもとさま}様に御眼^{おんめ}にかかりし事など思い出^{いだ}され、あの頃はさぞかし御許^{おんもとさま}様にも、——ああ、いや、いや。ほんとうに世の中はいやになつてしまふ。」

敏子は憂鬱な眼を挙げると、神経的に濃い眉^{まゆ}をひそめた。が、

一瞬の無言の後、鳥籠の文鳥を見るが早いか、嬉しそうに華奢な両手を拍った。

「ああ、好い事を思いついた！ あの文鳥を放してやれば好いわ。」

「放してやる？ あのお前の大事の鳥をか？」

「ええ、ええ、大事の鳥でもかまわなくてよ。お隣の赤さんのお追善ですもの。ほら、放鳥って云うでしょう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だつてきつと喜んでよ。——私には手がとどかないかしら？ とどかなかつたら、あなた取つて頂

戴。」

槐の根もとに走り寄つた敏子は、空気草履を爪立てながら、出

来るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さえとどこうとしない。文鳥は気でも違つたように、小さい翼をばたばたやる。その拍子にまた餌壺の黍も、鳥籠の外に散乱する。が、男は面白そうに、ただ敏子を眺めていた。反らせた喉、膨んだ胸、爪先に重みを支えた足、——そう云う妻の姿を眺めていた。

「取れないかしら？——取れないわ。」

敏子は足を爪立てたまま、くるりと夫の方へ向いた。

「取つて頂戴よ。よう。」

「取れるものか？踏み台でもすれば格別だが、——何もまた放すにしても、今直には限らないじゃないか？」

「だって今直に放したいんですもの、よう。取って頂戴よう。取って下さらなければいじめるわよ。よくって？ ハムモツクを解いてしまおうよ。——」

敏子は男を睨むにらようにした。が、眼にも唇にも、漲みなぎっているものは微笑である。しかもほとんど平静を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄こくはくなものさえ感じた。日の光に煙った草木くさきの奥に、いつも人間を見守っている、気味の悪い力に似たものさえ。

「莫迦ばかな事をするなよ。——」

男は葉巻を投げ捨てながら、冗談じょうだんのように妻を叱った。

「第一あの何とか云った、お隣の奥さんにもすまないじゃないか

？ あつちじや子供が死んだと云うのに、こつちじや笑つたり騒いだり、……」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になった。その上拗すねた子供のように、睫毛まつげの長い眼を伏せると、別に何と云う事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちよいと苦にがい顔をした。が、氣まずさを押しつけるためか、急にまた快活に話し続けた。

「だがまあ、こうしていられるのは、とにかく仕合せには違いないね。上シャンハイ海ハイにいた時には弱つたからな。病院にいれば氣ばかりあせるし、いなければまた心配するし、——」

男はふと口を噤つぶんだ。敏子は足もとに眼をやつたなり、影になつた頬ほおの上に、いつか涙を光らせている。しかし男は当惑そうに、

短い口髭くちひげを引張つたきり、何ともその事は云わなかつた。

「あなた。」

息苦しい沈黙の続いた後のち、こう云う声が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の悪い顔を背そむけていた。

「何だい？」

「私は、——私は悪いんでしょうか！ あの赤さんのなくなつたのが、——」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなつたのが嬉しいんです。御気の毒だとは思うんですけれども、——それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては悪いんでしょうか？ 悪いんでしょうか？ あなた。」

敏子の声には今までにない、荒々あらあらしい力がこもっている。男
はワイシヤツの肩や胴衣チヨツキに今は一ぱいにさし始めた、眩まばゆい日の
光を鍍金めつきしながら、何ともその間に答えなかつた。何か人力に及
ばないものが、巖然と前へでも塞ふさがつたように。

(大正十年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>